

二〇一七年度 入学試験問題

法学部A方式Ⅱ日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

二限国語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

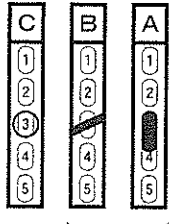
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

だれもが多くの知識を得たい、役に立つ知識を得たいと思っている。そこでイメージする「知識」は驚くほど人によって多様だ。しかし、どのように学べばよいのか、ということを考えるためには「知識とは何か」という問題を避けて通れない。知識に対する考え方、イメージが異なれば、自ずと学びの理想像とそのための学び方が異なってくるからである。

これからの世の中を生き抜くために大事なものは、論理的思考能力(批判的思考力と呼ぶ人もいる)だということを経験したる所で耳にする。しかし、論理的思考能力、批判的思考力などのことは極めて抽象的で、きちんと定義されないうまま、ふわふわと漂っているように思える。教育行政者、評論家や教育実践をする人たちの間でも、これらのことを曖昧なまま、様々な解釈を許す形で使っている感じがしてならない。これは、思考力、判断力を束ねている「知識」の意味が、人によってずいぶん違っていて受け止められていることが根にあるからだと思う。

知識観、つまり知識についての認識(知識についてのスキーマ)のことを「エピステモロジー」という。^{*}

知識は客観的なものであり、「事実」であると考えている人が多いと思う。例えば、「歩く」は英語では「walk」という動詞に訳すことができるという事実。天動説は誤りで地動説が正しいという事実。ニュートンが物体の運動に関する三つの法則(慣性の法則、運動方程式、作用・反作用の法則)を発見したという事実……。これらの「事実」が知識であり、それをたくさん覚えることが大事であるという認識が、現在多くの人に共有されている「知識についての認識」(エピステモロジー)であろう。

学びは受験のためではなく、大事なものは判断力、思考力だと主張する人でも、このエピステモロジーを持っている人はじつは多い。「知識＝事実」というエピステモロジーは、多くの人にとって非常に根強い思い込みの一つである。

どうしてこの思い込みが根強いのか？ ほんとうのところはわからないが、テスト文化の影響は否定できないだろう。どれだけ多くの「事実」を知っているかを問うことがテストでもっとも扱いやすいため、「事実」を覚え、それをテストで思い出して書き出す、ということをやつてきたところから習慣的にやつてきたためかもしれない。私たち日本人は「覚えた事実の量」を評価され

るといふテストを小さいころからずっと受け続けている。¹ こうした文化をもたない人々のエピステモロジーは、おそらく私たちとは大きく異なっているのだと思う。

いろいろな人と知識について話をし、「知識Ⅱ事実」のエピステモロジーを聞くたびに私が思い浮かべてしまうのは、ドネルケバブである。ドネルケバブは肉片を集成してつくる巨大な竹輪のようなもので、トルコの伝統的な料理だ。

知識はきれいに切り取ることができる断片である「客観的事実」として存在し、その断片を人から教えてもらう。「知識Ⅱ事実」のエピステモロジーでの知識モデルは、「客観的な事実」である知識片をべたべた表面に貼り付けていって、ひたすら大きくしていくイメージを喚起させる。私はこれを「知識ドネルケバブ・モデル」と呼んでいる。「知識Ⅱ事実」のエピステモロジー、それを根とする知識習得についての「ドネルケバブ・モデル」がなぜ「生きた知識」に結び付かないのかを、これから述べていこう。

母国語は、様々な知識の中でも「使うための知識」、つまり「生きた知識」の代表である。言語を使えるようになるために、子どもは何をどのように学んでいるのかをここであらためて振り返りたい。

そもそも言語は、断片的な知識をべたべた貼り付けていき、ボディをどんどん大きくしていけば使えるようになるわけではない。音韻の規則、文法、分厚い辞書にリストしてある単語の意味をすべて「暗記」しても使えるようにはならない。子どもはべたべた知識を貼り付けて母国語を使えるようになっていくわけではないのだ。

言語はあまたの要素が互いに意味をもって関係づけられてつくられたシステムである。語彙の学習を例に挙げれば、単語を覚えるということ、ドネルケバブの肉片を貼り付けるように、それまでの時点で作られている語彙にさらに新しい単語を加えていくことではないのだ。新しい単語を語彙に入れるために、子どもはその単語の意味を自分で考える。そのときには、すでに知っている単語との関係を考え、語彙のシステムの中の新しい単語の収まる場所を考える。³ 新しい単語が語彙に入れられたら、その単語と関係する単語の意味も変わりうるし、語彙のシステム自体も変動する。

これは言語に限らず、どのような分野の知識にも言えることである。最も役に立つ「生きた知識」とは、知識の断片的な要素

がべたべた塗り重ねられて膨張していくものではない。常にダイナミックに変動していくシステムなのである。このシステムは、要素が加わることによって絶え間なく編み直され、変化していく「生き物」のような存在なのだ。

「生きた知識」は目の前の問題を解決するのに使うことができるだけではない。新たな知識を創造するために使うことができる。新たな知識はゼロからは生まれない。すでに知っている知識を様々な組み合わせることで生まれる。創造力の源泉は持っている知識を使って想像することである。人は、想像力といま持っている知識とを組み合わせることによって、無限に新しい知識をつくっていくことができる。それに対して、ドネルケバブ肉片をべたべた貼り付けるように覚えただけの知識は、使うことができない。使えないから、他の知識と組み合わせられて新しい知識を生むこともないのである。

子どもは、母国語を学びはじめるや否や、母国語の音、語彙、文法などについて、個別の要素を学習していくだけではなく、それらを学習するためのスキーマをつくっていく。人は持てる知識を総動員して新しい知識の要素を獲得する。スキーマがうまく機能していれば、新しい要素を学習するたびに新しい要素はシステムに関係づけられ、前からある要素も修正されるし、システム全体がアップデートされる。母国語の単語の学習の時などは、このような語彙の局所的なアップデートがいつも起きている。

エピステモロジーは、思考力、学習力と深い関係がある。ドネルケバブ・モデルの知識観と、知識を常に再編成を繰り返すダイナミックなシステムとして捉える知識観とでは、目指す思考のありかたも、理想とする学びのあり方もまったく異なる。エピステモロジーには発達の段階がある。そして、それぞれの段階の知識観は、知識獲得、つまり学習と密接につながっている。コロンビア大学教授のディアナ・キューンによれば、エピステモロジーは「絶対主義」↓「相対主義」↓「評価主義」という三つの発展段階をたどるとしている。

小学生の多くは、知識は人によって解釈され、構築されるものであることを理解していない。彼らは科学者によって発見された知識が絶対的に正しい事実であると思っているし、科学者の仕事は「世界に存在する客観的事実を集めてくる」ことであると思っている。言い換えれば、知識は常に絶対的に正しい・正しくない、と二色に分けることができ、「正しい知識」はドネル

ケバブの肉片のように切り取られた形で世界に存在するものと考えているわけだ。

もう少し発達が進むと、知識は解釈されるものである、ということにはわかってくる。ただし、「自分は自分、人は人」というスタンスをとり、データの多様な解釈、多様な仮説、多様な理論は、それらが互いに対立するものであっても、どれでもOKだと考えてしまう。つまり、仮説や理論は様々な方面から検討・吟味・評価された上で最も論理的に一貫し、頑強なものが選ばなければならない、ということを理解していない。この段階のエピステモロジーを持つ人は、知識が構築されること、したがって絶対的でないことは知っている。しかし、知識がどのように構築されるかを理解していないので、どれも正しい、という相対主義に陥ってしまっているのである。

次のもつとも高い水準の発達段階になると、知識は単なる「考え」とは違うことを理解するようになる。とくに科学的知識とは、へ証拠によって実証されるべきものである。へそのためにはモデルを構築し、実験によって具体的に吟味可能な仮説を立て、実験からの証拠に照らして評価されなければならない。へ仮説は多くの場合、複数あり、それらの仮説のうち、どれが最もすぐれたものであるかを、証拠に照らして評価する必要がある。へということを理解するようになる。

科学を学習する目的は、科学者によって発見された「事実」を覚えることではない。今日覚えた(その時には「真実」と思っていた)事実や理論が、一〇年後には棄却されているかもしれない。

科学はデータをもとに論理を組み立て、理論を構築するプロセスである。では、「科学を実践する」ために、子どもは何を学ばなければならないのだろうか？ 学校で、理科の時間などで実験をし、データをとり、分析する、という学習はしているだろう。しかし、それらは「科学を行う」ための要素に過ぎない。科学的思考ができるようになるために必要なのは、むしろ、理論の検討のしかた、仮説の立て方、仮説の検討のための実験のデザインのしかた、データの解釈の仕方、結論の導き出し方、などの論理を組み立てるスキルなのである。

もちろん、ここでいう「科学」は自然科学に限らない。心理学はもちろんのこと、経済学、法学、社会学のような社会科学も同じだ。さらに敷衍すれば、どのようなことであれ、単なる好き嫌いではなく、理にかなった意思決定をするために、(単なる「論

理スキル」ではなく)いま述べた論理構築スキルに則った思考が必要なのである。

(今井むつみ『学びとは何か——「探求人」になるために』より。文章を一部改変した)

【注】 * スキーマ 物事を判断する際の認識の枠組み。

問一 傍線部1「こうした文化をもたない人々のエピステモロジー」とあるが、そのあり方の例として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 歴史上の人物や事実をより深く知るために、それに関する書物を多く読み、詳細な知識を蓄えていくようなあり方。
- イ 新しい漢字を習った時に、自発的に意味や部首を辞書で調べた上で、何度も書いて身につけていくようなあり方。
- ウ 理科の授業で教わった知識を、自ら実験によって確かめたり、別の現象にあてはめて考えたりするようなあり方。
- エ さまざまな応用問題に対応するために、数学や物理などの公式をできるだけ多く覚えようとするようなあり方。
- オ わからないことは恥ずかしながら専門家に聞き、素直にそれを受け入れて自分の知識にしていくようなあり方。

問二 傍線部2「貼り付けて」とあるが、これと対照的な意味あいでも用いられている言葉として最も適切な動詞を、六字以上十字以内で文中から抜き出し、解答欄に記せ。

問三 傍線部3「新しい単語が語彙に入れられたら、その単語と関係する単語の意味も変わりうるし、語彙のシステム自体も変動する」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 使ったことのなかった言葉を教わることによって、それまで知っていた他の言葉の意味が変容することになる場合があり、自身の語彙の体系が完成されるということ。

イ 知らなかった言葉の意味を知ることによって、それまであいまいだった別の言葉の意味がより明確になる場合があり、自分の中の体系的な語彙が豊富になるということ。

ウ 未知の言葉にであうことによつて、それと関係する別の言葉の意味がよりせばめられるようになる場合があり、語彙の体系が詳細で限定的なものになるということ。

エ 未知の言葉が既知に変わることによつて、それと関わる言葉の意味もまったく新しいものに変えられ、語彙の体系自体に別の意味が生じるようになるということ。

オ 新しい言葉を習得することによつて、それと関連する言葉の意味を改めて捉え直すことができる場合があり、語彙の体系が自分の中で新たに編み直されるということ。

問六 つぎのうち、本文の内容と合致するものをつ選び、解答欄にマークせよ。

ア 論理的思考能力が大事だと考える人々の間でさえ、知識についての認識が明確化されていないのは、必要なのは論理構築スキルなのだということが理解されていないためである。

イ ドネルケバブ・モデルの知識は、人から与えられるものに過ぎず、自発的に調べたりそれを基に考えたりすることが促されないため、役に立たない。

ウ 子どもは母国語を学ぶ際に、音や語彙、文法などについて個別に学習し、その知識を増やすことによって、徐々にこ
とばを習得していく。

エ エピステモロジーには発達のな段階があり、人は一般的に「ドネルケバブ・モデル」の知識から出発して、最終的には「生きた知識」をもつようになる。

オ 科学的知識は、仮説が実験によって実証されたとき、初めて評価されるものであるが、普遍的に正しいとはかならずしも言えない。

問七 波線部「理想とする学びのあり方」とあるが、筆者は科学の学びにおいて何が最も重要だと考えているか。四十字以上五十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

(二) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヒトはなぜ絵を描くのか。わたしは、進化の隣人であるチンパンジーと人間の子ども¹の発達過程を比較し、「絵を描く心の起源」にアプローチしてきた。そして、これまでの研究から浮かび上がってきたのが、想像力というキーワードだ。

チンパンジーは、特別な訓練をしなくても、絵筆を扱って絵を描くことができる。その筆さばきはなかなかのもので、作者を知らせずに絵を人に見せたら、有名な画家に違いないと思つた人もいた。色をぬりわけたり、ランダムな曲線を全体に広げたり、チンパンジーそれぞれに画風があつて、絵を見るだけで作者がわかるほどだ。しかしチンパンジーは、顔を描いたり、リンゴを描いたり、「なにか」を表す絵を描くことはない。子どものなぐりがきか、せいぜい抽象絵画といった感じだ。

そこで、単純な実験を考えた。片目がない顔の絵やリンカクだけののつべらぼうの顔の絵に自由におえかきしてもらう。人間の場合は、二歳後半になるとほとんどの子が、「あ、おめめない」などと言つて、「ない」目を補つて描いた。しかしチンパンジーは、そのリンカクを器用になぞつたり、描かれて「ある」目をぬりつぶしたりはするのに、「ない」目を補つて描くことは一度もなかったのだ。

そもそも、わたしたちが「なにか」を表す絵を描くことができるのは、紙の上にある描線を「なにか」として見立てているからだ。今ここにないものを想像する。それが人間とチンパンジーの違いのひとつであり、三万年以上もの間、人間が絵を描き、彫刻を彫り、芸術を生み出してきた原動力なのではないかと考えている。

そして、想像力は、言葉と深いかわりがある。

進化の過程で、人間は言葉を獲得した。それは、たんにコミュニケーションを変化させたばかりでなく、物の見方そのものにも変化をもたらしたと考えられている。目に入る物をつねに「なにか」として分類し、頭の中で言葉に置き換えるという記号的な物の見方だ。たとえばリンゴには、よく見るとさまざまな色や形があり、一つとして同じものはない。しかし「リンゴ」と一つの言葉で表されるからこそ、「リンゴ一つちょうだい」というやりとりができる。つまり、大雑把な物の見方をすることで、

抽象的な思考やコミュニケーションが可能になった。

大雑把な物の見方は、空の雲や壁のしみのようなあいまいな物の形にも、知っている「なにか」に似た形を見出そうとする。それが人間ならではの想像力であり、見立てということなのではないかと考えている。

さて、先日鞆の浦の、鞆の津ミュージアムを訪れた。アウトサイダー・アートの美術館で、ほかの美術館がしないような挑戦的な展示が評価されてきた。アウトサイダー・アートは、もともとはフランス語でアール・ブリュット(生の芸術)と呼ばれ、近年注目が集まっている分野でもある。正規の美術教育を受けずに、自発的な表現活動をおこなう人たちの作品のことである。知的障害のある人の作品がここに位置づけられることも多い。

^b カイサイ^aされていたのは「障害(仮)」という展示だ。しょうがい、かつこかり。一般的には、障害者の作品というだけで、障害者がこんな作品を作ってすごいとか、純粋な心が表れているとか、色眼鏡で見られてしまうことも、まだまだ少なくない。そのことに疑問を投げかけた展示だった。

作品は、障害の有無を問わずに集められており、現代アーティストの会田誠さんの作品も含まれていた。しかし、表現された作品には、障害の有無は関係なかった。むしろ表現とは、こんなにも自由で、真剣なほどばかしく、なによりもおもしろい、ということを感じさせるものだった。

じつはこの特別展にわたしも作品を提供していたのだ。研究に協力してもらっている、京都大学霊長類研究所のチンパンジー、アイの作品である。

他のアーティストたちの個性豊かな作品に見入ったり、ときににやにやしたりしながら観覧ルートをまわると、アイの絵は、その最後の部屋に飾られていた。黒い壁に金色のクラシカルな額縁が怪しげな存在感を出している。表現方法も個性的な作品のなかにあって、アイの抽象画のような作品は、むしろ「古典」といった趣すらあった。表現とはなにか、なぜ表現を求めのか、ということを深く考えさせられる展示だった。

チンパンジーが描くとき、いわゆる芸として教え込んでいるのとは違って、特別なハウシユウは必要ない。ご褒美のリング

がもらえるから筆を動かすのではなく、描くという行為そのものが「なんだかおもしろい」らしい。なぐりがきをする時期の人間の子どもを思い浮かべてもらうとわかる。自分がペンを動かすと、その動きに応じて目に見える軌跡が現れる。少しおおげさだが、自分の行為が世界を変容させるような感覚がおもしろいのだろう。だから本来、表現欲求のもつとも根底にあるのは、今ここで起こるその変化にむけられている、きわめて私的なものなのではないかと思う。

人間の子どもが、やがて「なにか」を表した絵を描くようになると、描くプロセスよりも、描かれたものが「なにか」が重要になってくる。その手は、世界を変容させるだけではなく、「なにか」を生み出すこともできるのだ。自分の描線のなかにイメージを発見し、それを外化するおもしろさに夢中になる。「これママだよ」「これ何に見える？」など、イメージを共有するためのおしゃべりも増える。絵を描けば、頭のなかのイメージを他者と共有できる。それは人間にとつてとても刺激的なことだ。そのため、表現欲求というと、この他者に向けられたものをイメージする人が多いのではないだろうか。

鞆の浦を訪れる前に、埼玉県立近代美術館でおこなわれていた「すごいぞ、これは！」展を見にいった。やはり、アール・ブリュットの展示である。少し変わったタイトルだと思っていたが、会場に入ると、文字通り「これはすごい！」という声があちこちからもれていた。たしかに、「美しい」でも「上手い」でもない、「すごい」と言いたくなる作品たちなのだ。

障害を持った人の作品のなから、全国の選りすぐりの作品が集められた展示だった。どれも独自の表現方法であり、高度な技術力やその手仕事のチミツさに驚かされるもの、発想の意外性や大胆さに驚かされるものがあつた。共通するのは、圧倒的な迫力があったことだった。

どんなふうに制作されたのだろうか。切り紙作品を展示していた藤岡祐機さんの作品を少しまねしてみることにした。紙の一部に、無数の微細な切りこみが入り、フリンジのようになっていた作品だ。ほどけていく平面から空間が生み出されるような、不思議な世界感があつた。

さて、家ではさみを握り、紙の一片をできるだけ細かく切ってみた。油断すると途中で切れてしまうので、かなりの集中力が要だ。紙の細さはとうていおよばないし、ほんの一センチ分を切るだけでも、目は疲れ、はさみを持つ手がすりそうになった。

紙を細く切る。その作業を毎日毎日、何年もの間続ける。繰り返しのなかで、おのずと技術や表現が磨かれていったのだろう。それはおそらく、なんのために、ではない。ただそうしたいからなのではないだろうか。自分のために、真剣に、肅々と取り組む。その積み重ねが超人的な技を生み出し、力強い表現を生み出すのだと思う。その圧倒的な迫力は、あるいは、一つひとつの作品に費やされたエネルギーが無意識に感じられるからなのかもしれない。

作品を生み出すための一つひとつの作業は、一見ばかばかしいようにも、無駄にも思える。しかし、「ばかばかしい」や「無駄」というのは、じつは、今持っている自分の価値観や既成概念の枠組みのなかで、意味や価値が見いだせないというだけのことだ。その枠組みをこわして、新たな価値に気づかせてくれるのが、アール・ブリュットなのだろう。いや、アール・ブリュットに限らず、アートがそういうものなのだと思う。

それは、石を捨てることに似ているのかもしれない。正月に実家に帰ったら、子どものころに捨った石ころが机の引き出しに眠っていた。ぴかぴか光った宝石のような石ころ、石器のようにとがった石ころ、顔のように穴があいた石ころ。どれも道端に落ちていけば、ただの石だが、自分ならではの価値を見出すことで、かけがえのない石ころになる。価値のないものに価値を与える。子どもが得意とすることだ。

並べて見ていると、価値を与えるという行為にも想像力が一役買っている。普段見慣れた物でも、別の物に見立てることで、新しい意味や価値が生まれる。一方、おとなの目には、石は石のままではしかない。そもそも、石の一つひとつに目を向けることさえ少なくなっているのではないだろうか。

ふと思った。チンパンジーの絵を研究しているというこの状況も、はたから見たら荒唐無稽³な、ばかばかしいことかもしれない。気づくのが遅いと言われるかもしれないが、自己紹介でいったん怪訝な顔をされるのは、そのせいなのかもしれない。⁴アーティストと研究者は、やはり似た者同士のような気がする。ばかばかしいこと、無駄なことを真剣にできるおとなでありたい。

(齋藤亜矢「チンパンジーとアール・ブリュット」より。文章を一部改変した)

問一 傍線部 a、d のカタカナを漢字に直し、解答欄に記せ。

問二 傍線部 1「想像力」のはたらきではないと思われるものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 幼児が絵の中の欠けていると思われる要素を補う。

イ これという特徴もない石に自分なりの価値を見出す。

ウ 普段見慣れているものをまったく別の物に見立てる。

エ アイが教えられもせず「古典」という趣さえある抽象画を描く。

オ 自分の描線のなかにあるイメージを発見し、それを外化する。

問三 傍線部 2「記号的な物の見方」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア あるものとはかのあるものとを関連づけて、その差異を研究の手がかりとする見方。

イ あるものを詳細に描写し、できるだけ正確な言葉で他の人に伝えようとする見方。

ウ あるものの形を自分が知っている形に結び付けようとする、想像力を駆使した見方。

エ あるものの色や形状的な特徴を詳細に把握し、その構成要素を分析しようとする見方。

オ あるものに共通する特徴を大まかにとらえ、それに名前をつけて分類する見方。

問四 傍線部3「荒唐無稽」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 言動に根拠がなく、現実味のないこと。
- イ 即物的で、味わいやうるおいがないこと。
- ウ 信念がなく、こっけいで無駄なこと。
- エ 説明不足で、十分に理解されないこと。
- オ 内容が粗雑で、面白味のないこと。

問五 傍線部4「アーティストと研究者は、やはり似た者同士のような気がする」とあるが、著者はなぜこのように感じていると考えられるか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア どちらも、新しい枠組みの中で、普段見慣れたものを定義しなおすことによって、人々に物の本質がなにかを気づかせることができるから。
- イ どちらも、新しい見方をすることで、既成の枠組みの中では意味や価値がないように見えるものに対して、価値観の革新をもたらすことができるから。
- ウ どちらも、新しい切り口で物ごとを提示することによって、既成の枠組みの問題点を浮き彫りにし、新たな枠組みを提案することができるから。
- エ どちらも、新しい観点から、一見無意味な作業を重ねることによって、既成の枠組みを問い直し、新しい価値観を提示していくことができるから。
- オ どちらも、新しい表現方法を用いて、既成の枠組みの内部のものと、その外部にあるものを組み合わせる新しいものを作り出すことができるから。

問六 つぎの各文について、本文で述べられている内容と合致するものにはaを、合致しないものにはbを、それぞれ解答欄にマークせよ。

ア チンパンジーは訓練によってご褒美のリンゴがなくても絵が描けるようになる。

イ 人間が長い歴史のなかで芸術を生み出してきた原動力は想像力である。

ウ 子どもがなにかを表現した絵を描くようになるには、イメージを共有するための言葉が必要である。

エ 人間が「なにか」を表す絵を描けるのは、描線を「なにか」に見立てるからである。

オ 芸術作品の力強い表現を生み出すものは、無意識の努力の積み重ねである。

問七 波線部「表現とはなにか、なぜ表現を求めるのか」とあるが、人間の表現欲求の根底にはどのようなものがあると筆者は考えているか。つぎの形式にしたがって、四十字以上五十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

人間の表現欲求の根底には、

がある。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

むかし、多賀幾子と申す女御おはしましけり。うせたまひて、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原の常行といふ人いまそがりけり。そのみわざにまうでたまひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします、その山科の宮に、滝落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるにまうでたまうて、「年ごろよそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。こよひはここにさぶらはむ」と申したまふ。親王喜びたまうて、よるのおましの設けさせたまふ。さるに、かの大将、いでてたばかりたまふやう、「宮仕へのはじめに、ただなほやはあるべき。三条の大御幸せし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石奉れりき。大御幸のち奉れりしかば、ある人の御曹司の前のみぞにすゑたりしを、島このみたまふ君なり、この石を奉らむ」とのたまひて、御隨身、舍人して取りにつかはす。いくばくもなくともて来ぬ。この石、聞きしよりは見るはまされり。これをただに奉らばすするなるべしとて、人々に歌よませたまふ。右の馬の頭なりける人のをなむ、青き苔をきざみて、蒔絵のかたにこの歌をつけて奉りける。

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ
となむよめりける。

〔伊勢物語〕より

【注】

- * 多賀幾子 文徳天皇の女御。
- * 七七日のみわざ 四十九日の法事。
- * 右大将藤原の常行 藤原良相の子で、多賀幾子の兄。
- * 山科の禪師の親王 仁明天皇第四皇子の人康親王。
- * おまし 宴席。

* 三条の大御幸 常行の父藤原良相邸への清和天皇の行幸。

* ある人の御曹司 ある女房の住んでいる部屋。

問一 傍線部①「かへさに」②「さるに」③「たばかり」④「すずろなる」の本文中の意味として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 「かへさに」

ア 挨拶する際に イ 返す際に ウ 帰る際に エ 交替する際に オ 別れる際に

② 「さるに」

ア 加えて イ したがって ウ そもそも

エ そうしたところ オ もしくは

③ 「たばかり」

ア 歓迎し イ 相談し ウ だまし エ 調査し オ 惑わし

④ 「すずろなる」

ア 驚かない イ 軽々しい ウ 関係ない エ つまらない オ 理解できない

問二 傍線部 a「いまそがり」b「せ」c「させ」d「なく」の品詞として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 名詞	イ 動詞	ウ 形容詞	エ 形容動詞	オ 連体詞
カ 副詞	キ 接続詞	ク 感動詞	ケ 助詞	コ 助動詞

問七 傍線部4「あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ」の歌の解釈として、最も適切なものをつぎの中

から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア まだ夜は明けませんが、私は岩に隠れています。そのように心を見せる御縁もないので。

イ 不十分ですが、岩に私の心を代えます。表にあらわせない心を見せる方法もないので。

ウ 見ても飽きない岩に私の心を込めます。外にはあらわせない心を見せる相手もないので。

エ 満足するわけではありませんが、岩に私の心を託します。私の心の底をあらわす時期ではないので。

オ 茜あかねの草々が岩に生い茂っています。表にあらわれない岩のように隠れている心を見せる機会もないので。